

2020年
2月10日号 No.1555



週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>



潮流

公正な地球社会のための教育を推進

認定NPO法人開発教育協会(DEAR)事業担当 岩岡由季子

資料

- ①「Society5.0時代に対応した教員養成を先導する教員養成フラッグシップ大学の在り方について」(最終報告)
——中教審・教員養成のフラッグシップ大学検討ワーキンググループ
- ②初任者研修実施状況(平成30年度)調査結果について
——文部科学省

CONTENTS

▶ 2 潮流

公正な地球社会のための教育を推進
岩岡由季子(認定NPO法人開発教育協会(DEAR)事業担当)

▶ 5 解説・ニュースの焦点

○教員養成先導するフラッグシップ大学で最終報告
編集部
○共通テスト、国語の試験時間を80分に
編集部

▶ 8 校長講話

校長室だよりを活用した学校経営・その⑨
井口寛隆(東京都武蔵村山市立第三中学校校長)

▶ 10 管理職養成 教頭実務ガイダンス

かけがえのない存在①～感性を豊かに～
多久知明(新宿区立新宿西戸山中学校副校長、全国公立学校教頭会会長)

▶ 12 『つまずき』に学ぶ学校づくり

学校再編のつまずき①
～置き去りの学校現場～
武井敦史(静岡大学大学院教授)

▶ 14 管理職必携 安心・安全の新常識

薬物依存の現実①
なぜ薬物依存症になるのか?
秋元恵一郎(特定非営利活動法人東京ダルク・精神保健福祉士)

▶ 16 特別資料

中国から帰国した児童生徒等への対応について(通知)

▶ 19 資料

①「Society5.0時代に対応した教員養成を先導する教員養成フラッグシップ大学の在り方について」(最終報告)
中教審・教員養成のフラッグシップ大学検討ワーキンググループ
②初任者研修実施状況(平成30年度)調査結果について
文部科学省

▶ 35 教育の危機管理

子ども虐待を理解するために(3)里親
安藤 博(子ども法学者)

▶ 38 事務新時代

学会リポート⑧
「教育協働」に必要な研修、権限などを共有
～近畿ブロック地域研究集会
日本教育事務学会事務局

▶ 40 高校現場最前線

「SGH」から「地域協働事業」へ
～世界を仲間とするグローバル教育を目指して～①
九里廣志(九里学園高等学校校長)

▶ 42 若手教師に伝えたい

「学級・授業づくり」とっておきのツボ
この時期だからこそ押さえない「漢字の覚え方」
俵原正仁(兵庫県芦屋市立宮川小学校校長)

▶ 44 変わる教育委員会

「Do the nearest duty(今 この時に全力を)」
米谷和也(富山県・高岡市教育委員会教育長)④

▶ 45 教育問題法律相談

家庭裁判所調査官の調査(家事事件)
角南和子(弁護士)

▶ 46 現場の課題に応える教育センター

学校に寄り添い、支援する教育センター①
～「SNSチェックシート」等のアセスメントによる児童生徒理解～
福永広隆(鹿児島県総合教育センター所長)

▶ 48 BOOK

『いじめ・虐待・体罰をその一言で語らない』
『自閉症スペクトラム障害の性支援ハンドブック』

▶ 49 自著を語る

『「孤独な育児」のない社会へ』
神原智子(読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局専門委員)

▶ 50 今さら聞けない!? マナーと常識

国旗のプロトコール
柴崎直人(岐阜大学大学院教育学研究科准教授)

▶ 51 データで見る教育

高等学校の各学科に共通する教科・科目等及び標準単位数

▶ 52 マイオピニオン

「わかる授業」のワナ
尾崎春樹(学校法人目白学園理事長)



認定NPO法人開発教育協会(DEAR)
事業担当
いわおか ゆきこ
岩岡由季子さんに聞く

潮流

公正な地球社会のための教育を推進

公正で持続可能な社会の実現のため
「知り・考え・行動する」ための開発教育を
推進してきた。3月には参加型学習の
「教材体験」のイベントを企画している。

公正な地球社会づくりに参加

認定NPO法人開発教育協会(以下、DEAR)は、一人ひとりが社会問題を理解し、共に生きることのできる公正で持続可能な地球社会づくりに参加することを目的として1982年に設立された。2003年にNPO法人となり、2018年には、認定NPO法人となった。「知り・考え・行動する」地球市民を育むことをミッションに、大きくネットワーク、実践・研究、情報・出版、人材育成の事業に取り組んできた。開発教育は、私たち一人ひとりが、開発をめぐるさまざまな問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることのできる公正で持続可能な地球社会づくりに参加することをねらいとした教育活動のこと。具体的な学習目標として①多様性の尊重(文化の多様性を理解し、あらゆる人びとを尊重する心を育てる)②開発問題の現状と原因(貧困や南北格差の現状を知り、その原因を理解する)③地球的諸課題の関連性(開発をめぐる問題と環境破壊などの課題との密接な関連を理解する)④世界とわたしたちのつながり(開発をめぐる問題とわたしたち自身との深い関わりに気づく)⑤わたしたちのとりくみ(課題を克服する

ために行動・参加する能力や態度を養う)――を掲げている。

岩岡 開発教育は英語の「Development Education」を直訳したもので、もともとはヨーロッパで生まれた教育活動です。「貧しい南の国々と豊かな北の国々」といういびつな関係の背景には18世紀からの植民地政策がありますが、その流れが未だに残っていることの反省に立っています。このような関係をフェアなものにしていくには、経済や社会の仕組みを変えていく必要があります。民主主義の社会では、こうした問題の解決には話し合いと、あるべき社会をつくっていくための担い手を育てる教育の役割がとても大きくなります。与えられた「最適解」ではなくて、自分たちで解決策を考える必要がありますし、時には矛盾の壁にぶつかることもあります。また、知識注入型ではなくて参加型のワークショップによる学び合いが必要と考えています。

DEARでは、「知り・考え・行動する」地球市民を育むことをミッションとしているが、参加型学習で持続可能な社会の在り方を楽しく、かつ深く学べるような教材や出版物も多数発行してきたという。また、参加型学習で学ぶ「開発教育入門講座」を

月に1回程度実施し、開発教育の初歩を学ぶ場なども用意している。

岩岡 学校や社会教育、NPOやNGOの現場で役立つ教材として、これまで多数の教材を作ってきました。小学生以上を対象とした「世界がもし100人の村だったら」は国際人権教育アワードを受賞し、現在も人気があります。また、経済のグローバル化を考える「新・貿易ゲーム」も定番教材として活用されてきました。最近では「写真で学ぼう!地球の食卓」や「スマホから考える世界・わたし・SDGs」「コーヒーカップの向こう側」なども人気があり、消費者教育の場でも活用されています。

3月に「教材体験FESTA」を開催

こうした開発教育の教材は同協会のウェブサイトで、その一覧を見ることができ、一般の書店では扱っていないが、ウェブサイトやFAXでの注文ができる。昨年は実施しなかったが、今年の3月20日・21日には、2日間で計21のワークショップがある「教材体験FESTA2020」を東京・新宿区のJICA地球ひろばで実施する予定という。

岩岡 これは開発教育の新作の教材や定

番教材を実際に体験できるイベントです。学校現場ではアクティブ・ラーニングや探究などの取り組みが広がってきましたが、毎回、学校の先生方や教職を目指す学生、国際協力や教育に関心のある方が参加しています。2日間の開催にするこゝとで、1日当たりに3コマ(1コマは約2時間)のプログラムに参加できるようにしました。ファシリテーションに決まったスタイルはないのですが、少なくとも1日に3人の異なるファシリテーターに接する体験ができることも魅力の一つです。

現在、「気候変動」の新教材(3月発行予定)を作成しており、とても注目されています。緊急性が高く、将来の世代まで大きく影響を与える問題です。気候変動による影響や問題を理解し、私たちの生活とのつながりや自分は何ができるかを考えることをねらいとしており、このイベントで教材の一部を体験することができます。

学校現場では、今春から小学校で新学習指導要領に基づく教育課程が全面实施となるが、アクティブ・ラーニングや探究型の学びを進めていくためには、従来の知識注入型ではなくて、学習者主体の学びに寄り

添って、その想いや考えを引き出す教師の「ファシリテーション」の力が大切になっている。最近、同協会が企画・運営するイベントなどに、教職を目指す大学生や4月から現場で教師になる人の参加が増えているという。それだけ、新しい学びへの関心や、ファシリテーションの具体的な方法などへの関心が高まっていることがうかがえる。

岩岡 今回の教材体験FESTAのプロ
グラムにも、「ファシリテーション」の講座を設けています。ファシリテーターとは、コミュニケーションと学びを創り出す人です。決して、「定型」のファシリテーションがあるのではなく、ファシリテーター自身、そして、学習者の特性や特徴を把握して、自ら工夫して創り上げていく必要があります。今回のイベントでは、自らのファシリテーションを創る準備となる講座のほか、参加者の考えを引き出したり、深めたりするための「問いづくり」に注目して、参加者とともにその視点を考える講座などを用意しています。

なお、このイベントの参加者以外でも当日、会場で教材の展示や販売なども行っており、実践方法などに関する悩みや質問などにも対応しますので、気軽にご参加していただければと思います。

主体的な学習に役立てる

同協会が発行している「教材」は、学校で言えば、生徒用ではなくて教師用の指導教材という位置付けで、その中に複数のアクティビティが示されている。一つのアクティビティは45〜50分で終えることができ、授業の1コマに相当する。実際には教師が生徒の学習状況などを考慮し、アレンジして使うことが多い。

岩岡 先に紹介した「地球の食卓」は、いろいろな国の家庭の1週間分の食料を並べて撮られた写真を使ったアクティビティが入っています。生の食材が多い家庭もあれば、日本のように加工食品が多く、食材を包装しているプラスチックの多さから環境への負荷なども読み取れます。自国で生産される食材もあれば、輸入品が多い国もあり、自給率などを考えることもできます。一般的に、開発教育で活用する教材は、さまざまな教科などで利用できますが、この教材については家庭科や社会科などで利用されることが多いようです。また、私たちが作成した教材は、参加型ということを重視していますので、単に知識として学ぶというよりは、アクティブ・ラーニング的な視点

学習者が主体となって学んでいくための教材として開発しています。このため、生徒の主体的な学習に役立てたいと、学校の先生方からも注目されています。

「教材体験FESTA」などで行うワークショップでは、参加者からなるべく多様な意見や考えが出てくるかどうかを、講師としての評価観点としている。参加者が同じような意見や考えをした場合は、講師の側が意図しなくても「こう考えてほしい」と誘導してしまった結果かもしれないと反省材料にしているという。

岩岡 私たちは教育の専門家ではありませんが、開発教育の教材を活用してくださる現場の先生方は、評価の仕方もいろいろと工夫されています。例えば、「異なる立場の人の視点を考慮した発言ができていくか」「学んだことを自分の身近な事例と結びつけて考えているか」など、教師が一方的に期待する視点ではなくて、視点そのものの広がりや相対化ができていくか、自分を客観視できているかなど、学習者の視点から学びの広がりや深まりを評価している方が増えているように感じています。

認定NPO法人開発教育協会(DEAR) 〓
<http://www.dear.or.jp/>